

生成AIにできないことの発見



月尾 嘉男

2060年には大半の仕事が人工知能に代替されるという予測がある。この予測が正しければ情報社会に移行した現在の先進諸国では三次産業分野で騒乱が発生することが想定される。この問題を解決するのは、より高次の活動だ。それが何者であるかを探索することが今後の人間活動の中心になる。

2011年にデューク大学教授が「現在の子どもが大学を卒業するとき、65%は現在の社会に存在しない職業に就業する」と発言した。翌年にはダ・ヴィンチ研究所長が「これから数十年間で地球に存在する仕事の半分に相当する20億人の仕事が消滅する」と発表した。これらは一種の予言であったが、それを明確にした研究が発表された。

2013年にオックスフォード大学の二人の学者が発表した『雇用の将来…コンピュータは職業の将来にどのように影響するか?』という研究は現存する約700の職業が(何年までとは限定されていないが)社会から消滅する確率を計算した内容で、時計修理、情報調査、税務処理な

ど残存確率1%とされた消滅職業が話題になった。さらに2017年にはアメリカとイギリスの学者が『人工知能が人間の能力を凌駕するとき』という研究を発表し、さまざまな仕事を人工知能が代替する時期を推計した。

2020年代中頃に原稿朗読や自動翻訳は代替されると予測して的中したが、衝撃は現在の社会に存在する大半の仕事が2060年には人工知能に代替されるという予測である。

過去には革新技術の出現が社会の既存構造を崩壊させてきた事件は何度も発生している。史上有名な騒乱は19世紀初期にイギリスで発生したラダイト運動であり、18世紀後半に発明された自動織機が職工の大量

失業の原因になったことに反発した人々が各地の織物工場に乱入して機械を破壊し、軍隊が出動するほどの騒乱に発展した。

これは二次産業分野での事件であるが、情報社会に移行した現在の先進諸国では三次産業分野で騒乱が発生することは十分に予測できる。実際、人工知能の進歩によって、これまで三次産業に従事していた大量の人々の仕事代替される予兆がすでに発生している。それも事務作業の水準ではなく芸術などの創造作業にも拡散している。

将棋や囲碁など競技規則のある分野では、2010年代の中頃から人間の名人でさえ人工知能に敗北するようになっているし、小説の執筆や絵画の制作など

規則のない分野でも生成AIが進出を開始している。2023年の芥川賞の受賞作家の九段理江さんは受賞作品でも全体の5%程度はAIが作成した文章であると発表して話題になった。さらにアメリカのSF雑誌では応募作品の多数が生成AIで作成した内容であることが判明し、一般からの公募を中止するようになった。画像を生成することに特化した生成AI「ミッドジャーニー」は数語のキーワードを入力するだけで、数分で見事な絵画を作成することができ、人間の領分とされていた芸術の領域も侵食されはじめている。

この難問への対処は今後の重要な課題になる。ラダイト運動時代の産業の中心は二次産業であったため、産業の中心が三次産業に移行することによって問題は一旦消滅した。しかし現代社会の中心である三次産業が直面している問題を解決するのは、より高次の活動である。それが何者であるかを探索することが今後の人間活動の中心になる。

つきお・よしお1942年生まれ。東京大学工学部卒業、東京大学教授、総務省総務審議官などを経て、現在は東京大学名誉教授。